

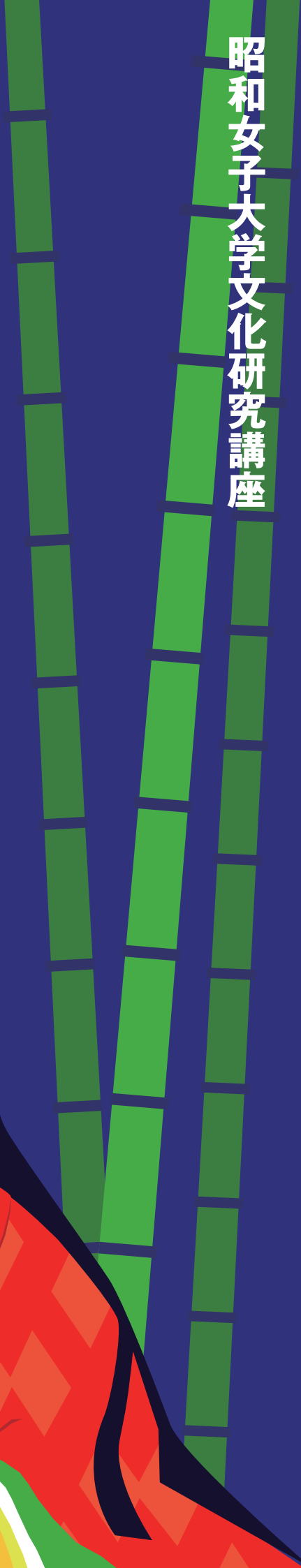
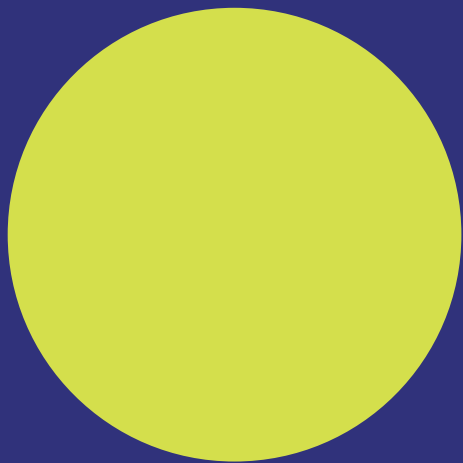
平井秀明

作曲・台本

オペラ

かぐや姫

(全2幕)



◆指揮◆

平井秀明

チェコ・ワイルトウオージ室内管弦楽団

◆演出◆

浜畑賢吉

元劇団四季 現大阪芸術大学教授・舞台芸術学科長

◆キャスト◆

かぐや姫	佐竹由美	帝	三浦克次
翁	立花敏弘	姫	諸田広美
車持皇子	布施雅也	大納言	吉川健一
中納言	清水良一	公家	加茂下稔
石作皇子	谷川佳幸	里の娘	九嶋香奈枝
天の王	清水良一	※中納言と二役	

◆合唱◆

かぐや姫合唱団

昭和小学校児童・母親有志

◆管弦楽◆

東京交響楽団

◆舞台監督◆

アートクリエイション

◆照明◆

矢口雅敏

2012年 11月27日 [火] 18:15開演

昭和女子大学
人見記念講堂

◆主催◆

昭和女子大学

◆制作◆

(株)山崎音楽事務所

◆協力◆

(株)ミリオンコンサート協会

サークル「竹取の里」※かぐや姫合唱団

子ども育成音楽プロジェクト「こどおん」

イラスト:山岡正雄

平井秀明
作曲・台本

オペラ かぐや姫

(全2幕)

心温まるハーモニー、斬新かつ感動的なオペラ——『キャンペラタイムズ』オーストラリア

美しいメロディーと魂を揺さぶる音楽——『スプラヴオダイ』チェコ

素晴らしい国民オペラの誕生に感動——『音楽の友』日本

「夕鶴」を超える可能性を秘めた優れたオペラ——『音楽現代』日本

オペラ「かぐや姫」について

平井秀明 指揮者・作曲家

1992年2月、ニューヨークで国際政治専攻の傍ら、音楽院で指揮法も学んでいた頃、日本文化の紹介も兼ねて、「3世代で楽しめる日本語のオペラ」の作曲を思い立った。題材には誰もが知る「かぐや姫」が最適と感じ、姫が月に帰る運命を翁と姫に告白する「別れの Aria」を、一晩で作詩作曲した。翌年夏、首都ワシントンで新鋭黒人ソプラノの心温まる日本語歌唱で初演されたところ、想定外の大きな反響があり、地元紙第一面をカラー写真で飾るなど将来のオペラ化へのリクエストが多く寄せられた。10年余り構想を温めた後、2003年2月、かつては筍の産地であった東京都目黒区にて、世界初演が実現した。

日本最古の物語である「竹取物語」は、子供にとってはおとぎ話、大人にとっては平安貴族の恋の鞘当、お年寄りにとっては人生の教訓など、世代ごとに異なる楽しみ方がある点も、大きな魅力であろう。第1幕では、月から来た姫は人間の俗性を伴わず、求婚者たちを冷遇することへの罪悪感も持たない一方で、彼らの訪れに戸惑い、かつ期待を抱く若い娘として描いた。第2幕では、3年余りを経た姫の精神的成長に焦点を当てた。無理難題に苦しむ求婚者たちの哀れな姿や中納言の死を通して、能天気な姫にも同情心が芽生える。

姫の噂を耳にした帝もついに求婚者に加わり、姫も次第に帝の寛容で気高い人柄に惹かれるようになる。満月の夜が近づくにつれ、地球上での叶わぬ恋、月へ帰るべき辛い定め、そして最愛の翁や姫との「宿命の別れ」を悟り苦悩するなど、人間らしい喜怒哀楽の情念が宿る。最高権力者の帝や全能の姫をもってしても得られない幸せが存在し、また姫を失う翁と姫にとり、不老不死の薬は無意味である。まさに、人生の不条理さこそ、この作品に秘められた深いテーマである。

台本にも様々な工夫を凝らし、原作では描かれなかった幼少の姫、里の母子たちを登場させ、親子共演までも可能にした。5人の求婚者たちにも、貴公子の車持皇子、腕っ節の強さを誇る悪漢の大納言、真面目な役人の中納言、笛の名手である石作皇子、おどけ役の公家、と対照的なキャラクターを付けた。さらに、姫のライバル役として、竹取の里一番の美女こと「里の娘」も登場する。

竹取伝説の根底には、地球と月・宇宙間の人々の交流というテーマが流れ、日本の枠を越えたスケールの大きな物語と捉えられる。人間の宿命である「出会いと別れ」を巧みに描いた日本最古の物語の奥深さを実感し、作曲にあたっては東西融合を意識し、日本的様式に限定せず、ユニヴァーサルな視点で国際的に理解しやすい作風を目指した。“Princess from the Moon”と英訳して Aria を発表した背景にも、こうした思いが込められている。

留学先で祖父母を想いながら書いた「別れの Aria」(“おじいさん、おばあさん、いつもわたしは幸せでした…”)が、10余年を経て一粒の種からオペラに成長した。2002年11月30日、ついに初演の稽古初日を迎え、当時入院中だった祖父平井康三郎(「平城山」、「スキー」、「とんぼのめがね」などの作曲で知られる)を稽古前に見舞い少しオペラの話をした。祖父の長年の夢だったオペラ作曲を私が引き継ぎ、待望の初稽古が始まる旨を報告すると、とても喜んでくれた。しかし、稽古に出かける頃に容体が急変し、祖父は静かに息を引き取ったのだった。そのため祖父を見送ることと、月へと旅立つかぐや姫を見送るイメージが重なり、極めて感慨深いものがある。「3世代で楽しめるオペラ」を通じて、希薄となりつつある現代の家族の絆を強める一助にでもなれば、と願っている。